

## 論文の内容の要旨

論文題目： Producing the Nation: Memory, Race, and Gender in  
Chinese and Japanese War Films

(国家の制作：中国と日本の戦争映画における記憶・民族・ジェンダー)

氏名： WEISS Amanda ワイス アマンダ

20世紀後半から21世紀初頭にかけて起こった記憶をめぐる大きな「うねり」を出発点として、本博士論文は東アジアにおける第二次世界大戦（1937-1945）という特定のコンテキストの、映画という特定の様式を通じた想起のあり方について探求する。第一章では、グローバル・メモリーをめぐる動向に位置づけながら、東アジアの歴史論争の主要な歴史的出来事と主題群を提示する。その上で、過去の集合的な語りとして記憶を定義しつつ、かつての記憶のあり方が口語的伝統や儀礼、儀式に基づいていたのに対して、現在のそれは「記憶の場」において制度化されていると主張する。過去についての考えを現在の上にとしっかりと刻み込むために私たちが制作した「標識」、例えば公共図書館やモニュメント、インスタレーション・アート、映画といった器に記憶は組織的に配置されているのである。その中でも、映画はその複製性、情動に対する影響力、過去と現在を曖昧にする性質、そして真正性への訴求力の点で際だった「記憶の場」であるという考えから、第一章では映画に限定して焦点を当てる。特に、人種とジェンダーのイメージを通じて国家の過去を物語る戦争映画のジャンルは、国家の記憶を構築するための必須の表現である。中国と日本の戦争映画を分析することで、私たちは近年のナショナル・アイデンティティの語りを考察することができるのである。

第二章では、戦後の極東国際軍事裁判、すなわち東京裁判（1946-1948）で確立され認定されている戦争の「典型的な物語」を中国と日本の映画がどのように拒絶しているのかについて議論する。「東京裁判」をめぐる「典型的な物語」はアメリカをヒーローとして、日本を加害者として、中国を被害者として位置づける。対して中国の有名な映画『東京裁判 (Tokyo Trial)』（2006）は、アメリカによる歴史の「管理」として描かれる物語に対しても、日本の歴史修正主義者が戦争への唯一の見方として提示する物語に対しても異議申し立てを行うものである。これに対して日本の映画は二つの傾向を示している。まず主流の映画は、「典型的な物語」の側面を保持しつつ日本の犠牲者性に焦点を当てる。他方で右翼映画はヒロイズムに訴えかけ、東アジアを無視し、より対等な米日関係を求めるものとなっている。まだ犠牲者性の物語が支配的なものであり続けているが、それとは対照的なヒロイックな物語も、そういった物語が日本で以前よりも目立つようになった時期に登場したという点で重要な意味を持つ。

第三章では、先行する戦争の物語に対して中国と日本が行う異議申し立てのさらなる事例として、中国と日本の戦争映画における新たなマスキュリニティの出現について論じる。戦争映画において記憶の係争はマスキュリニティの競合として想像される。このことを踏まえると、新たな中国人ヒーローの出現は次のような状況を表していると考えられる。まずそれは、(武術

対太極拳や青龍刀と「亮剣魂」対日本刀というような) 中国と日本の文化的比喩の衝突の描写を通じて行われる、日本の歴史修正主義に対する勢いを増した異議申し立てを表している。また同時に、「漢奸」(対日戦争下における対日協力者を意味する)として名指しされる人々の勢力がわずかではあるが復興したために変化しつつある台湾との関係性が背景にある。これに対して主流の日本映画は、犠牲者としてのヒーローという問題含みの表象と軍上層部の従来よりも肯定的な姿を提示している。他方でより「右翼」的な映画は軍の犠牲者への明確な尊敬の念と再軍備への欲望を描き出している。

第四章では、南京大虐殺および(戦中の性的奴隷の婉曲表現である)いわゆる「慰安婦」の問題のある表象について議論する。他のどの言説よりも、この章で取り上げる映画は戦争の記憶に対して最も多様で問題を孕んだ反応を示しており、中国、アメリカ、日本の記憶をめぐる言説の複雑な重なり合いを浮かび上がらせている。中国と日本の戦中のレイプに関する映画(しばしばそれはアメリカ側の言説との対話を経由する)は、より幅広い文脈に位置づけられる政治的な物語を補強するために、個々の女性のトラウマを曖昧にする傾向にある。南京大虐殺に関する日本の右翼/左翼映画が、国家の誇り/日本兵の尊厳といった問題やナショナル・アイデンティティといったより大きな問題について取り組む傾向にある一方で、多くの中国映画は「去勢」された過去を語ることに苦心している。

第五章では、東京裁判から距離を取った物語を確立しようとするポピュラー・メディアの試みについて議論することで、中国と日本の想起のあり方を考察する。和解の物語の様々な位相を追尾することで、(共同製作を介した)物語外においても(親和的な和解のイメージを介した)物語内においても、中国と日本の中で和解の動きが徐々に失われてきていることを主張する。近年の物語は、元々は国家間の和解の象徴であった中国人と日本人による家族をナショナリズムの媒体へと作り替えさえするのである。

第六章では、中国と日本の映画では時間に対する関係性がまったく異なっており、その結果、自身が経験していない過去をあたかも経験したかのような感情を生み出す補綴的な記憶のあり方もまた両者では異なっていると結論づける。1990年代以降の中国映画は、女性化された中国の歴史のかたきを打つ男性的な漢民族のヒーローの形象を通じて「国家的屈辱」に関する政治的な物語を再生産している。国家への攻撃に対する危機感を煽りながら、複数の物語にまたがって展開される過剰さや明快さ、連続性は、中国人オーディエンスに特有の時間の感覚を押しつける。他方で日本の映画は、家父長的でありつつ犠牲者でもある兵士という形象に見られるように、惟我論と両義性に向かう傾向にある。それらの物語は時間的距離、明快さの欠如、一貫性の綻びを描き出すことで、様々な立場のオーディエンスが右翼/左翼/主流の政治的意見を横断しながら解釈を行うことを可能にする。このことはまた、意図的にせよそうでないにせよ、戦争責任を軽視し、再軍備への道を開くことへと繋がっている。根底において、これらの戦争映画は、東アジア地域における日本の影響力の変化、変わりつつある米日、米中関係、そして中国の興隆を表している。